

(標準訳)

児のそら寝

昔、延暦寺に児(が)いた。僧たち(が)、宵の所在なきに、「さあ、ぼたもち(を)作ろう。」と言った(の)を、この児(は)、期待して聞いた。そうかといって、作り上げる(の)を待つて寝ない(の)も、よくないにちがいないと思つて、片隅に寄つて、寝ているふりで、でき上がる(の)を待ったところ、はやくも作り上げた様子で、騒ぎ合っている。

この児(が)、きつと起こそうとするだろうと、待ち続けていると、僧が、「もしもし。お目覚めなさいませ。」と言つ(の)を、うれしいとは思ふけれども、ただ一度で返事するしたらそれも、待つていたのかと思ふといけないと(思つ)て、もう一声呼ばれて返答しようと、我慢して寝ているうちに、「これ、お起こし申し上げるな。幼い人は、寝込んでしまわれたよ。」と言つ声したので、ああ、情けないと思つて、もう一度起こしてくれよと、思いながら寝て聞くと、むしやむしやと、ただひたすら食べに食べる音がしたので、しかたなくて、ずつとあとに(なつて)、「はい。」と返事をしてしまったので、僧たち(は)笑ふこと(が)際限ない(ことだつた)。

(翻訳機)

子供 の タ ヌ キ 寝 入 り
宇治拾遺物語

今となつては昔のことだが、比叡の山に子供は存在した。僧達、宵が手持ち無沙汰であつて、「さあ、ぼたもちを作ろう。」と言つたのを、この子供が、期待に聞いた。だからといって、し出すようなのを待つて寝ないようなのも、よくなかつただろうと思つて、片方に寄つて、寝ている理由で、現れるのを待ったところ、すでにし出している様子で、ひしめき合っている。

この子供が、かならず目を覚まさせるだろうと、待つて座っていると、僧が、「お話し上げるのでございましょう。目を覚まさせるお与えになれ。」と言つ(の)を、うれしいとは思ふけれども、たつた一度に答えるようなのも、待つたとも思ふからといって、いま一声呼ばれ手が答えようかと、我慢して寝ているくらいに、「おい、どうか起こして差し上げないでくれ。おさない人は、寝入りなかつた。」と言つ声が一面に広がつているので、まあ、苦しいと思つて、もう一回起こせよと、思い寝と聞くと、むしやむしやと、まっすぐ食べに食べる音が一面に広がつているので、どうしようもなくて、長期のうちに、「はい。」ときらへたりたので、僧達を笑ふことが限らない。